

第4章

チョーサーにおける派生語と脚韻

4.1 はじめに

Donner (1978) はチョーサーの言語について次のように述べている。

“Chaucer’s interest in them [derivational patterns of word formation] can be instructive. His own sense of how they work must, after all, reflect his sense of how language itself works. But even though his skill at language, as one of his most admirable qualities, has been analyzed time and again in considerable detail, his handling of derivational processes has not attracted much comment.”¹

ここで Donner (1978) はチョーサーの言語の特徴を明らかにするためにはチョーサーの英語に見られる語形成の研究が重要であるが、これまで、チョーサーが作品を書くために派生語や複合語をどのように用いてきたかについては十分な研究はなされていないと指摘する。

周知のように、チョーサーの作品は散文でも書かれているが、ほとんどは韻文で書かれている。そこで本論考ではチョーサーが韻文作品を書くにあたって派生語形成をいかに活用していたかを脚韻(rhyme)との関係から考察したい。

4.2 翻訳作品と創作作品

脚韻との関係という観点からチョーサーの派生語形成を論ずる場合、二つの面を考える必要がある。一つは明らかに原典があり、それに基づいて書かれたためその原典の言語の影響を強く受けたであろうと考えられる翻訳作品に見られる派生語形成であり、もう一つはチョーサー独自の作品における派生語形成である。

4.3 創作作品の場合

まず、チョーサーが創作作品において脚韻の必要から彼独自の派生語を創り出したと考えられる例について見てみる。

"Mooder," quod she, "and mayde bright, Marie,
 Sooth is that thurgh wommanes *eggement*
 Mankynde was lorn, and damned ay to dye,
 For which thy child was on a croys yrent.
 Thy blisful eyen sawe al his torment" (CT.ML. 841-5)²

この例では *eggen* (v.) [=to urge, incite] に *-ment* が付加されて名詞 *eggement* が創られている。この語は 845 行目の *torment* と押韻させるためにチョーサーが最初に用いた語である。*eggement* が脚韻の位置に現れなければ、チョーサーは次例のように派生名詞(*derived nominal*)³ *eggyng* を使っている。

Thugh *eggyng* of his wyf, hym for to pleye (CT.Mch. 2135)

eggyng という語はすでに 1200 年ごろに現れている。

Pin *egginng* iss off flæshess lusst, & nohht off sawless fode.
 (c1200 *Ormulum* 11675) (=Thy act of urging is of bodily desire and not
 of soul's food.)⁴

従って、押韻をする位置になければ CT.Mch. 2135 に見られるように、チョーサーは *eggyng* を使用していたであろうと考えられる。つまり、チョーサーは *torment* と押韻するために *-ment* 形である *eggement* という語を新たに作ったのである。

同じことは次のいくつかの例についても言える。

(1) *preambulacioun*:

What spekestow of *preambulacioun*?
 What! amble, or trotte, or pees, or go sit down! (CT.WB. 837-8)

preambulacioun (=making a preamble) はやはりチョーサーが初めて用いた語である。この語は次の行の脚韻語 *down* の *-oun* と押韻させる必要から使われたものである。この場合も、次の例から明らかのように、押韻に関係なければチョーサーは *preamble* という語を用いている。

"Now dame," quod he, "so have I joye or blis,
 This is a long *preamble* of a tale!" (CT.WB. 830-1)

(2) *divinistre*:

Therefore I stynte; I nam no *divinistre*;
Of soules fynde I nat in this registre, (CT.Kn. 2811-2)

divinistre (=diviner; theologian) は動詞形 *divinen* に行為者を表す接尾辞 *-stre* が付加されて創られたチョーサーの造語である。これも、次行の脚韻語 *registre* と押韻させるために用いられたものである。押韻する必要がなければ、次の例のように *divynour*⁵(=foreteller of the future)が使われている。

Or elles what difference is ther bytwixe the prescience and thilke japeworthi
devynynge of Tyresie the *divynour*; (Bo 5.pr.3.134)⁶

(3) *contemplaunce*:

He fasted longe and was in *contemplaunce*.
"Aaron, that hadde the temple in governaunce, (CT.Sum. 1893-4)

この例での *contemplaunce*⁷(=contemplation)も次の行の *governance* と押韻させるためにチョーサーが初めて用いた造語である。なお、*contemplation* はチョーサーには用いられていないが、英語ではすでに c1230 *Ancrene Riwe*(Corpus Christi) 39aに見られる。

wið *contemplaciun* þet is wið heh þoht & wið hali bonen bi niht toward heouene.
(c1230 *Ancrene Riwe* 39a)

(4) *willingli*:

Wondrynge upon this word, quakynge for drede,
She seyde, "Lord, undigne and unworthy
Am I to thilke honour that ye me beede,
But as ye wole youreself, right so wol I.
And heere I swere that nevere *willingly*,
In werk ne thoght, I nyl yow disobeye, (CT.Cl. 358-63)

この場合も *willyngly*(=*willingly*)は 359 行目の *unworthy* の *-y* と押韻するために副詞派生接尾辞 *-ly* を *willing* に付加させてチョーサーが初めて創り出した語である。ただ、*willyngly* の場合は同じ意味で *wilfully*(=*willingly*)がすでにチョーサーで 11 例も用いられており、音節の数も *willyngly* と同じ 3 音節の語である。

That I wol lyve in poverte *wilfully*?
 Nay, nay, I thoghte it nevere, trewely! (CT.Pard. 441-2)

また CT.Cl. 362 の韻律分析(scansion)をすると次のようになろう。

^xAnd heere ^xI swere that ^xnevere ^xwillyngly[´]

にもかかわらず、チョーサーが何故わざわざ *willyngly* を使ったのかその理由が不明である。ただし、チョーサーが脚韻の位置で *wilfully* を用いているのはこの CT.Pard. 441 の例のみであり、残りの 10 例は散文で使われているか、韻文で使われていても脚韻以外の位置に現れている⁸。チョーサーは同じ語を脚韻語として用いることをあまり好まなかったということを考えると⁹、CT.Cl. 362 で *wilfully* を脚韻語として使うことを避けたとも解釈できる。

(5) *yemanly*:

A sheef of pecok arwes, bright and kene,
 Under his belt he bar ful thriftily
 (Wel koude he dresse his takel *yemanly* (CT.Prol. 104-6)

この例では 105 行目の *thriftily* の *-y* と押韻するために、チョーサーは「*yeman* + *-ly*」により *yemanly* (=in the manner befitting a good yeoman)を創り出したのである。この語はチョーサーには 1 例しかみられない。

4.4 翻訳作品の場合

チョーサーが派生語を創り出したもう一つの場合はチョーサーの作品が翻訳原典の脚韻語に強く影響されているものである。

Her blisful swete song pitous
 And in this sesoun *delytous*, (RRose 89-90)

参照：原典となっている古フランス語のテキスト

As oisiaus les douz chanz piteus.

En icelui tens *deliteus*, (Le Roman de la Rose 83-4)¹⁰

ここで *delytous* (=delightful) という語が用いられているのは、*pitous* と押韻するためのものである。フランス語原典では脚韻の位置に現れている語が *deliteus* と *piteus* になっており、これに影響されてチョーサーは「*delyt + ous*」という派生語を創り出したのである。*delytous* はチョーサーにもう 1 例見られる。

As was in that place *delytous*.

The gardeyn was not daungerous (RRose 489-90)

上記の例では、フランス語原典には *delytous* に相当する語は見られないが、チョーサーは「*delyt + ous*」という派生語を用いている。これ以外の例では、チョーサーは *delitable* (=delightful)¹¹ または *delicious* (=delightful)¹² を用いている。

Noght fer fro thilke paleys honorable,

Wher as this markys shoop his mariage,

There stood a throop, of site *delitable*, (CT:CL 197-99)

And feyne hem pore, and hemsilf feden

With gode morcels *delicious*,

And drinken good wyn precious, (RRose 6178-80)¹³

参考までに、散文に使われている例を挙げておく。

thise ben faire thynges and enoynted with hony swetnesse of Rethorik and

Musike; and only whil thei ben herd thei ben *delycious*. (Bo 2.pr.3.11)

4.5 翻訳作品で英語本来の接尾辞を用いている場合

チョーサーは、原文で押韻する語として用いられている単語を英訳する際に、英語本来の接尾辞を用いて派生語を創り出している。

(1) 次の例は、原文の押韻している現在分詞の語尾 *-ant* が、英語の方で *-yng* 形の派生語に置き換えられていることを示している。

And maden many a *tourneying*
Upon the fresshe grass *spryngyng*. (RRose 1407-8)

参照：原典となっている古フランス語のテキスト

Aloient entr'aus *torneiant*
Sor l'erbe fresche *verdeiant*. (Le Roman de la Rose 1382-3)

(2) 古フランス語の副詞の接尾辞 *-ment* が英語の *-ly* によって訳され、押韻するのに使われている。

And eek I telle you *certeynly*
How that she wep ful *tendirly*. (RRose 331-2)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

Si sachiez bien *veriteument*
Qu'ei ploroit mout *parfondement*. (Le Roman de la Rose 323-4)

certeynly (< *certeyn* OF)、*tendirly* (< *tender* OF)とも、古フランス語からの借用語に英語本来の接尾辞 *-ly* を付加したものである。しかし、古フランス語原典では *certeyn*, *tendre* あるいはそれらの副詞形で押韻しているわけではない。従って、原文の古フランス語副詞の接尾辞 *-ment* のみが英語で *-ly* による派生語で押韻したと解釈できる。もちろん、次の例のように、「ゲルマン語系基体 + *-ly*」で押韻している場合もある。

Wel coude she synge and *lustly*;
Noon half so wel and *semely*. (RRose 747-8)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

Bien sot chanter e *plaisamment*
Ne nule plus *avenamment*. (Le Roman de la Rose 731-2)

この場合、*lust*, *seme*とも古英語起源の語であり、それらに英語本来の接尾辞 *-ly* が付加されたものである。

(3) *Troilus and Criseyde*でも *-ment* で終わるイタリア語の副詞が *-ly* による派生語で訳されている。

For which for to departen *softely*
Took purpos ful this forknowynge wise,
And to the Grekes cost ful pryvely (TC 1.78-80)

参考：原典となっているイタリア語のテキスト

Per che, *segretamente* di partirsi (Il Filostrato 9.1)¹⁴

(4) 古フランス語原典で *-esse*(=*-ce*)の語尾で押韻しているところを、チョーサーは *-nesse* 形の派生語 *lenesse*[(*=leanness*):*lene* (adj.) + *-nesse*]を用いている。

Nor nothyng lyk of *lenesse*
For sorowe, thought, and gret distresse, (RRose 307-8)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

De paleté ne de *maigrece*
Car li esmais e la destrece (Le Roman de la Rose 297-8)

(5) しかし、チョーサーは古フランス語原典が *-esse* (= *-ce*) で押韻していないところでも、*-nesse* 形の派生語で押韻している。Masui (1964)¹⁵は、チョーサーが *-nesse* 形の派生語を脚韻語として頻繁に用いる傾向があると指摘している。

And if a man were in distresse,
And for hir love in *hevynesse*, (RRose 1223-4)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

E s'ele un ome conetist
Qui fust destroiz por s'amitié, (Le Roman de la Rose 1202-3)

- (6) このことは -yng 形の派生語についても言える。ただし原典に該当箇所はない。

The swalowe Proigne, with a sorowful lay,
Whan morwen com, gan make hire *waymentynge*
Whi she forshapen was; and evere lay
Pandare abedde, half in a *slomberynge*,
Til she so neigh hym made hire *cheterynge* (TC 2.64-8)

- (7) 次の接尾辞を用いた派生語は古フランス語原典で押韻されている語をそのまま英語に置き換えた顕著な例である。

And many a spice *delitable*
To eten whan men rise fro table. (RRose 1371-2)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

E mainte espice *delitable*
Que bon mangier fait après table. (Le Roman de la Rose 1345-6)

Of thilk yimages the *semblaunce*,
As fer as I have in *remembraunce* (RRose 145-6)

参考：原典となっている古フランス語のテキスト

De ces images la *semblance*,
Si com moi vient en *remembrance* (Le Roman de la Rose 137-8)

4.6 創作作品にも翻訳作品にも言える場合

下記の例では、'pleasure' の意味を表すのに、*lustiheed*, *lustinesse* という異なった派生接辞を持つ語が用いられている。古英語系接尾辞 -heed, -nesse のどちらを使うかは脚韻によって決められている。

No man but Launcelot, and he is deed.
Therefore I passe of al this *lustiheed* (CT.Sq. 287-8)

“And shortly, deere herte and al my knyght,
Beth glad, and draweth yow to *lustynesse*,
And I shal trewely, with al my myght,
Youre bittre tornen al into swetenesse. (TC 3.176-9)

次の場合も ‘vigour’ の意味を表すのに *lustiheed* と *lustynesse* の両形が用いられている。脚韻のために、*-heed* 形と *-nesse* 形の接尾辞が交互に使用されたことは明らかである。

And after daunced, as I gesse,
[Youthe], fulfilled of *lustynesse*, (RRose 1281-2)

That I have lost al *lustyhede*.
Suche fantasies ben in myn hede (BD 27-8)

さらに、次の例でも同じことが言える。

But whan the cok, comene *astrologer*,
Gan on his brest to bete and after crowe,
And Lucyfer, the dayes messenger,
Gan for to rise and out hire bemes throwe, (TC 3.1415-8)

ここでもチャーサーは 1417 行目の *messenger* の *-er* と押韻させるために英語本来の接尾辞 *-er* を付加して創られた *astrologer*(=*astrologer*, *astronomer*)を用いている。この例以外ではすべてラテン語系の接尾辞 *-ian/-ien* が付加された *astrologien*(=*astrologer*, *astronomer*)が使われている¹⁶。

Of alle men yblessed moot he be,
The wise *astrologien*, Daun Ptholome,
That seith this proverbe in his Almageste: (CT.WB. 323-5)

4.7 脚韻以外の原因による場合

これまで脚韻と派生語の関係について述べてきたが、ここで脚韻以外の原因によると考えられる派生語の使用について触れておきたい。

チョーサーでは形態的に同じ接辞を繰り返す場合がある。例えば、次の例では *-yng* 形あるいは *-nesse* 形の派生語が繰り返し用いられている。

Myn is the *drenchyng* in the see so wan;
Myn is the prison in the derke cote;
Myn is the *stranglyng* and *hangyng* by the throte,
The murmure and the cherles *rebellyng*,
The *groynyng*e, and the pryvee *empoysonyng*s (CT.Kn. 2456-60)

“precious *clothyng* is cowpable for the derthe of it, and for his *softenesse*,
and for his *strangenesse* and *degisyngnesse*, and for the superfluitee, or for
the inordinat *scantnesse* of it.” (CT.Pars. 414)

また次の場合は *-itee* 形が多用されている。

I sey nat that *honestitee* in *clothyng*e of man or woman is uncovenable, but
certes the *superfluitee* or disordinat *scantitee* of *clothyng*e is reprevable.
(CT.Pars. 430)

ここでは *scantnesse*(=*scantiness*)の代わりに *scantitee*(=*scantiness*)が用いられていることに注目したい。中英語ではロマンス語系起源の接尾辞 *-itee* は、古英語起源の接尾辞 *-nesse* と同じように形容詞に付加されて抽象名詞を形成するのに用いられている。ただし、*-nesse* 形は基語となる形容詞がラテン語系の語にでも非ラテン語系の語にでも付加して、抽象名詞が形成されるが、*-itee* 形はラテン語系の形容詞のみに付加して派生語が作られる。とすると、チョーサー初例のこの名詞 *scantitee* の形容詞 *scant* は、古ノルド語 (Old Norse) 起源の語、つまり非ラテン語系の語であるので、本来なら *scantnesse* となるはずである。事実、*scantnesse* はチョーサーに 3 例見られる。

Upon that oother side, to speken of the horrible disordinat
scantnesse of *clothyng*, (CT.Pars. 422)

このように古ノルド語起源の語にチョーサーが、本来語形成規則上付加されるべきでない *-itee*

形を用いたのは *honestitee*, *superfluitee* と形態的に並置した派生語を意識的に使用したいがためと解釈できる。ちなみに、チョーサーでは非ラテン語系の基語に接尾辞 *-itee* が付加されているのはこの1例のみである。

4.8 逆派生の場合

最後に、逆派生(*back-derivation*)について触れておきたい。中英語期に逆派生という語形成の方法がみられる。これは接尾辞 *-er* または *-yng* をもつ名詞から派生される動詞に限られた語形成であった。例えば、チョーサーには次のような例が見られる。

thane may he telle it, so that his entente ne be nat to *bakbite* the persone,
(CT.Pars. 1018)

ここに使われている動詞 *bakbite* (=to defame) は名詞形 *bakbitere* (=defamer) の *-ere* を除去して創られたものである。

the *bakbitere* wol turne al thilke goodnesse up-so-doun to his shrewed
entente. (CT.Pars. 493)

ところが、チョーサーでは次のような特種な逆派生の例が見られる¹⁷。

And er that ye *jupartēn* so youre name, (TC 4.1566)

jupartēn は 'to endanger' の意味で使われている動詞であり、チョーサーが初例である。これは名詞形 *jupartye* (=danger) から創られた逆派生語である。

And whan he thurgh his madnesse and folye
Hath lost his owene good thurgh *jupartye*, (CT.CY. 742-3)

OEDによれば、'danger' の意味での *jupaartye* はやはりチョーサーが初例である。*-ye* (または *-ie*) は他の名詞から抽象名詞を派生するのに用いられる接尾辞である。例えば、*bachelorie* は 'state of a bachelor' の意味であり、*felon-ye* は 'crime' の意味になる¹⁸。従って、本来ならば逆派生 (つまり、*jupartye* から *jupartēn* の派生) は生じないのであるが、この種の語形成の類推からチョーサーは名詞 *jupartye* から動詞 *jupartēn* を創造したのである。

4.9 まとめ

以上の例から言えることは、チョーサーの派生語形成が脚韻を創りだすために利用された場合がかなりあるとうことである。この種の派生語形成はチョーサー独自の創作作品にも翻訳作品にも観察される。

最近では Elliott(1974)¹⁹や Davis(1974)²⁰ がチョーサーの語形成における行為者を表す接尾辞 *-er* および接頭辞 *un-* の生産性に言及しているが、最初にも触れたように、チョーサーの語形成の原理や方法について徹底的に分析・記述された研究はまだない²¹。Görlach(1978)²²が指摘しているように、チョーサーの語形成について十分な調査・分析を行うことはチョーサーの言語の、あるいは中英語の語形成を明らかにするために有意義な研究である。このために、散文と韻文との相違、翻訳作品と作家独自の創作作品との相違、チョーサーと同時代の作家たちの作品との比較、などの観点からチョーサーの語形成を研究することも重要であろう。

- 1 Donner (1978: 1) を参照。また、Kastovsky (1985:221)は英語の語形成の歴史的研究で網羅的になされたものは現在のところないと指摘している。さらに、米倉 (1992: 53-4) および Dalton-Puffer (1992:465)を参照。
- 2 チョーサーの作品の省略表記はMEDによる。
- 3 中英語では *-ing/-yng* 形の多くは現代英語にみられるような完全に動詞的性質を持った動名詞(*gerund*)にはなっていない。従って、Emonds(1973)などはチョーサーに見られる *-yng* 形は派生名詞と言うべきだと主張している。さらに、14世紀英語における派生名詞の動詞的性質については田島(1977)を参照。
- 4 MED (s.v. **egging** ger. (1))を参照。
- 5 *divynour* (OF *devineor*)の初例は c1330 である(OED s.v. *diviner*)。
c1330 R.Brunne *Chron* 8107 þus seide alle my *dyuinours*(=so seid all my prophets)
- 6 *Boece* は翻訳作品であるが韻文ではなく散文であるので、*Boece* からの例を挙げておく。なお、チョーサーでは *divinistre* は CT.Kn. 2811 にしか現れず、*divynour* は *Boece* 3.pr.3.134 にしか使われていないということもある。
- 7 *contemplauce* はOEDに記載されていない。MED (s.v. *contemplauce* n.)はチョーサーからの例(CT.Sum. 1893)しか挙げていない。そして *governaunce* と韻を踏ませるためにチョーサーが用いたと明記している。
- 8 *wilfully* は CT.NP. 3096, CT.NP. 3367, CT.NP. 3432, TC 2.284, CT.Mel. 1236, CT.Mel. 1422, CT.Pars. 576, CT.Pars. 586, Bo 4.pr.2.181, Bo 4.pr.2.182 で使われている。
- 9 Oizumi & Yonekura (1993)に示されている *The Canterbury Tales* の Ranking Rhyme Word-Frequency List(303-17)を参照。同じ語を何度も脚韻の位置で用いないという傾向はチョーサーの他の作品でも言えることである。Fries(1985:54)は *The Canterbury Tales* では脚韻の位置に1回しか用いられていない語が2279あると述べている。なお、Masui(1964:323-46)、Yonekura (1996a)および Yonekura (1996b) も参照。
- 10 引用したテキストは Longlois (1914:24)。
- 11 OED による *delitable* の初例は c1290。
- 12 OED による *delicious* の初例は c1330。
- 13 *The Romaunt of the Rose* には断篇 A, B, C があり、チョーサーが全ての断篇を翻訳しているかどうかについては諸説がある。本論考ではおぼろげにチョーサーの手によるとされている断篇 A のみを調査対象にしているが、ここでは参考までに断篇 C からのものも挙げておく。
- 14 引用テキストは Windeatt (1984)。
- 15 Masui (1964: 13)を参照。
- 16 *astrologien* はこの例を含めて7例で使われている：他の6例は Astr.Pro. 62, Astr.Pro. 73, Astr. 2.4.3, Astr. 2.4.19, Astr. 2.4.31, Astr. 2.26.26 である。
- 17 Donner (1978:4-5)を参照。
- 18 Fisiak (1965:64)を参照。
- 19 Elliott (1974:60-3)を参照。
- 20 Davis (1974:80)を参照。
- 21 翻訳作品における派生語形成に言及しているものに Kallich (1983:154) がある。また、チョーサーの語彙の研究であるが、そのなかで Cannon (1998:154-59) はチョーサーの派生語にふれている。
- 22 Görlach (1978:84-5)を参照。